

小原 仁編

『玉葉』を読む

——九条兼実とその時代——

勉誠出版 二〇一三・三刊

A5 四二六頁 八〇〇〇円

本書は、一九九六年十月より始まる「玉葉輪読会」の成果にもとづく、十六名の執筆者による論文集である。構成は以下の通り。

第一部 九条家と九条兼実 ①小原仁「九条兼実の願文をめぐるノート」／②宮崎康充「九条兼実室「兼子」について」／③菊池紳一「九条兼実の知行国について」／④甲斐玄洋「鎌倉前期における朝幕交渉の形態的特質」／⑤高田義人「藤原兼実と医家」／⑥三橋正「九条家における基層的神祇信仰」／⑦佐藤道生「九条兼実の読書生活」

第二部 『玉葉』に見る公家社会 ⑧柿島綾子「十二世紀における仁和寺法親王」／⑨高山京子「興福寺への御願供養と料所寄進」／⑩中村文「叡山僧としての隆寛」／⑪黒澤舞「治承四年の新嘗祭と五節舞について」／⑫山田彩起子「王家における后妃故実の蓄積とその意義」／⑬平藤幸「藤原経宗の口伝」

コラム 稲元紘子「吉時について」／石塚賢治「甘摂政考」／菊池紳一「院の近臣藤原光能」／ポール・シャロウ「漢文日記の内面性を読む」

第一部では、兼実を取り巻く政治状況だけでなく内面にも迫る。

①は兼実自作直筆の寿永二年願文を詳細に検討、願意や信心を読み取る。②は兼実の妻妾・子女を分析、兼子が正室であることを検証。③は知行国の実態を三代にわたり分析、譲与・相伝が確認できない点を明らかにする。④は関東申次制度の確立を自明視することへの危険を説き、実態に即した朝幕交渉の把握を目指す。⑤は兼実と医家の関係を考察、主治医の変遷をたどる。⑥は兼実が旧儀を維持しつつも、新しい神祇信仰を創始する過程を考察。⑦は『素書』の例から読書の具体相を示し、充実した読書生活の裏に指南役として明経道などの儒者の存在を指摘。

第二部では、公家社会における儀式および僧侶や寺院を考察する。⑧は守覚登場以前の事蹟を検討、御室の地位確立に努めた覚法を評価。⑨は上皇らの御願供養により寄進された料所が興福寺を経済的に支え、以後の興福寺の存続に繋がる点を指摘。⑩は叡山僧隆寛の前半生を和歌史の観点から考証。⑪は福原遷都など異常事態の起きた治承四年における五節舞を検証、五節のみが新造内裏で行われたことから宮廷秩序の可視化の手段として位置づけられたとの理解を示す。⑫は后妃故実について、当初は撰関家に蓄積されていたものの、璋子入内を機に新儀が創出され、王家における蓄積が開始したと主張する。⑬は経宗が兼実の批判を受けつつも、重盛や宗盛らに公事・故実を伝授し、一門の結束に与った姿を親平氏公卿の在り方の一例としてみる。

コラムでは、「甘摂政」など従来見落とされてきた事柄に言及する。

兼実については、多賀宗隼『玉葉索引』解説の「兼実とその周

辺」が主要な研究成果であるが、本書にはこれに修正・付加を行う論考が少なくない。『玉葉』研究の現状が凝縮された一冊といえよう。また政治・文化・宗教など、さまざまな角度から読解が試みられ、その成果がバランス良く配置されている点も魅力である。一読をおすすめしたい。

(山本みなみ)